Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-14

城下町絵図から見た近世都市の空間構造の変遷 : 尼崎城下町を事例として

川﨑, 有里紗

(Citation)
兵庫地理,62:19-37

(Issue Date)
2017

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004013

兵庫地理 62（2017）19-37

城下町絵図から見た近世都市の空間構造の変遷

―尼崎城下町を事例として―

川﨑　有里紗

1. はじめに

江戸幕府は一国一城令、さらには武家諸法度を制定し、幕藩体制を築き上げていった。江戸時代において代表的な都市形態の 1 つである「城下町」は、江戸幕府と政治的には密接なつながりを持ちながら、各藩の独立した空間であった。本稿では城下町に焦点を当てて詳細な復元を試み、城下町の要素とその変遷について検討を行うことで、江戸時代の城下町の空間構造について考察を加える。

城下町に関する研究について、小野（1928）は城下町とは城郭を中心として成立する町であり、門前町が寺社の門前に発展するということと同じであると述べる。この研究以降、城郭に主眼を置いて城下町を論じた研究が数多く見られる[1)]。

景観の変遷を取り上げた数々の研究と到達点は、矢守（1970）の城下町プランの研究[2)]に示されている。矢守は、城下町とは城郭などの藩施設、家臣が集住する侍町、町人が集住する町人町、寺院が集中する寺町、足軽が集住する足軽町と言った要素により構成された町である、と定義し、それに基づいて類型化を行うことで、城下町の時系列的かつ空間的な変容を明らかにした。これ以降、他の研究者によっても研究がなされている。例えば、侍町に焦点を当てた後藤（1997）は、阿刀田（1936）の仙台城下町絵図のトレース図をもとに、仙台城下町における景観復元図を年代別に作成し、年代が下るにつれて侍町が拡大することを明らかにする。町人町や寺社に焦点を当てた関戸・木部（1998）は、館林城下町の寺町と町人町の空間構造を検討することで、城下町建設当初からの総郭型のプランが維持されたことを明らかにする。

一方で、城下町の構成要素の定義についての再検討とも言える研究が行われるようになる。その一つの方法として研究視点の緻密化があげられる。従来の研究では、侍町や町人町を屋敷の集合体として巨視的な視点で捉えてきたが、研究視点の緻密化とは、家臣や町人などの個々の屋敷のあり方といった細部の分析をするものである。2000 年代の研究には、家臣の屋敷に焦点を当てた渡辺（2000）の研究がある。渡辺は、米沢城下に居住する家臣の屋敷地が年代ごとで、ある一定の法則を持って移転することを明らかにする。日本史分野では、吉田（2012）は江戸を対象地域とし、その内部構造を明らかにする。18 世紀前半の町屋敷絵図から本町一丁目について、1830 年頃完成の『御府内備考』に掲載された「境内惣図」から根津神社について、1840 年代の「江戸御上屋敷惣御絵図」から加賀藩の上屋敷について検討している。しかしこれらは、要素も年代も異なるものである[3)]。歴史考古学分野では、前川（1991）が織豊期の有岡城下町の町割りを基にした在郷町・伊丹郷町を取り上げているが、町内の部分的な発掘調査成果によるため、未調査地区への考察は正確さを欠く[4)]。そこで本稿では、城下町全体を視野に、江戸時代を通して年代ごとに城下町を構成する各要素の変遷を検討する。その際、城下町絵図[5)]を使用する。

本稿における対象地域は摂津国尼崎城下町とする。尼崎城下町は大坂の西の喉元ともいうべき位置にあり[6)]、大坂に対する警護の役割を担う面を持ち合わせていた。このように政治的に重要な役割を果たしていた尼崎城下町については、その空間構造を明らかにした研究が複数ある。その中でも尼崎城下町絵図から空間構造を明らかにしたものに、小野寺（1980）、小野寺（1982）の研究がある。戦国時代における尼崎城の位置・中国街道のコース・寺町・尼崎城下の町人町の 1 つである築地町・城の櫓について、年代の異なる 5 枚の城下町絵図を使用し、1635 年から 1690 年頃までの変遷を明らかにしている。また近年では、河野（2015）が、尼崎城下に建

てられた貴布禰神社の鎮座地の変遷を、1716 年の城下町絵図とそれ以前の景観が描かれた城下町絵図から明らかにしている。これら尼崎城下町の空間構造に関する先行研究は、城下のある特定の要素に焦点を当てて論じられているものの、他にも城下町を構成する要素はあり、現状では取り上げられていない問題もある。

そこで本稿では、先行研究には取り上げられていない要素、例えば近世城郭・寺社などについて検討した上で、尼崎に入封した大名家ごとに尼崎城下町の空間構造を復元する。そして、尼崎城下町の空間構造の変遷過程や背景について考察を加える。

2. 尼崎城下町の概要

尼崎城下町は、猪名川と武庫川が運んだ土砂が堆積してできた沖積平野上にある[7]。現在は、兵庫県尼崎市の一部となり、阪神電気鉄道尼崎駅の南側に位置する（図 1）。

江戸時代において、尼崎城下町は八つの町と別所村から構成されている。八つの町の町名としては大物町・市庭町・別所町・風呂辻町・辰巳町・宮町・中在家町・築地町である。さらに宮町は出屋敷と呼ばれる飛び地を持つ。別所村は西屋敷・東屋敷・寺町からなる（図 2）。また城郭は本丸・二ノ丸・三ノ丸から構成されている。二ノ丸はさらに松ノ丸と南浜とに分けられ、三ノ丸は東三ノ丸と西三ノ丸とに分けられる[8]（図 3）。

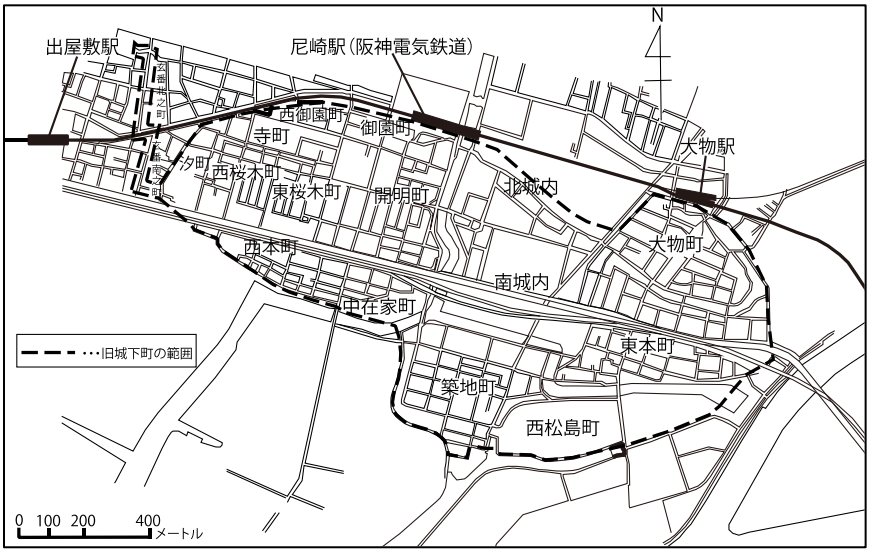

図 1　旧尼崎城下町の範囲（ArcGIS ベースマップ「地形図」より作成）

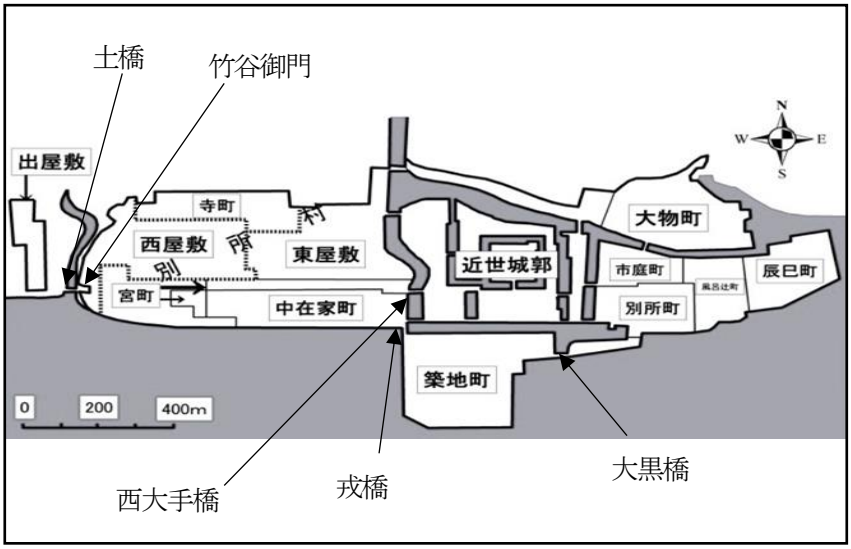

図 2　江戸時代の尼崎城下町（『尼崎地域史事典』より作成）

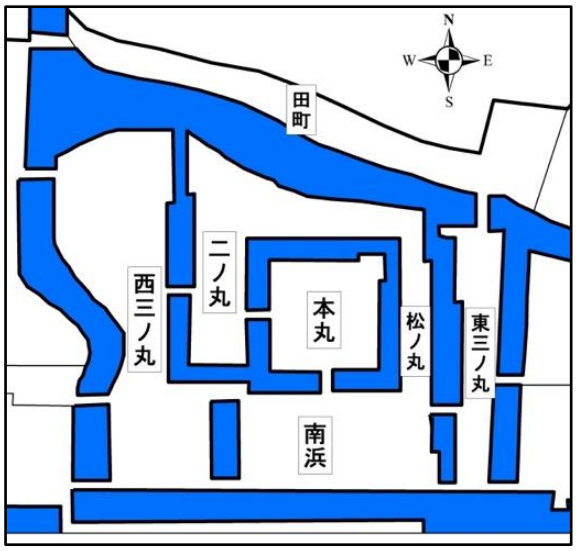

図 3　城郭とその周辺　（図 2 の近世城郭部分の拡大。『尼崎地域史事典』より作成。）

尼崎城下町に拠った大名家は 3 つある。それは戸田氏、青山氏、桜井松平氏（以後、桜井氏と表記）で、いずれも譜代大名である。戸田氏以前までは池田氏の郡代として建部氏が、大物に居城し、1 万石で尼崎を統治していた [9]。以下、入封順に各大名家について説明する [10]。

1618（元和 3）年 7 月、近江国膳所から移り尼崎で最初の大名となるのが戸田氏鉄である。氏鉄の父・一西は、3 万石で膳所の地に封ぜられ、早くから徳川氏に従って軍功があった。そのため氏鉄も厚く信頼され、大坂の陣後 2 万石の加増を受けて尼崎に入封し、江戸幕府の全国的な秩序維持構想に基づいて城郭と城下町建設を行った。これが今に残る尼崎城下町となった。氏鉄は 1624（寛永元）年、大坂城普請の際に奉行を勤めたことなど幕府への功労を認められ、尼崎の治政 18 年の後、1635（寛永 12）年 7 月に、5 万石を加えられ 10 万石で美濃国大垣へ移封された。

青山幸成は、大坂の陣の功労が認められたことなどにより、徳川家康の老中を 10 年間勤める。家康の隠居後、1633（寛永 10）年に 3 万 5 千石で遠江国掛川の地を与えられる。さらに徳川家光に功労が認められ、1635（寛永 12）年 7 月に 1 万 5 千石を加えられ、尼崎へ 5 万石で入封する。治政は文武を奨励し、領内の新田開発をはかるなど藩政の向上につとめる。1643（寛永 20）年 3 月からは幸成の子・幸利が藩主となり、42 年間にわたって藩政をとる。幸利の孫にあたる幸督の子・幸秀は、1710（宝永 7）年 10 月に家督を継ぎ、翌 1711（正徳元）年に四方領地替えにより信濃国飯山に 4 万 8 千石で転封となる。青山氏はのちさらに丹後国宮津を経て美濃国郡上八幡に移り、明治に及ぶ。

桜井（松平）忠喬は、1696（元禄 9）年に従五位下・遠江守となり、4 万石で遠江国掛川へ移封、さらに 1711（正徳元）年 2 月に尼崎に移される。この松平氏は徳川氏の祖、松平太郎親氏の玄孫にあたる長親の子・信定に発するとされ、信定は三河国碧海郡桜井村に居住して桜井の松平と称する。忠喬以後、6 代続き、1871（明治 4）年まで 160 年間にわたり尼崎の藩政をとる。1861（文久元）年 8 月、松平忠興が藩主となる。幕末動乱期は朝廷方に加担して、勤王藩として行動する。そのため 1868（明治元）年、松平姓を廃して先祖の地・桜井村の名を取って桜井氏と名乗る。1869（明治 2）年 6 月、版籍奉還に際して知藩事となり、1871（明治 4）年の廃藩置県に及ぶ。

3. 尼崎城下町絵図の選定

尼崎城下町絵図は現在、22 点が確認されている [11]。その内、城下町全体が描かれ、家臣名や寺社名などの注記 [12] が読み取れるものを選定する。その条件に適するものは、「摂州尼ヶ崎城詳図」（以後、A 図と表記）、「摂州尼ヶ崎城図」（以後、B 図と表記）、「尼崎城下武家屋敷一覧之図」（以後、C 図と表記）である。A 図、B 図、C 図を解読し、要素ごとに示したものが図 4～図 6 である。

以下に、それぞれの城下町絵図について概要を述べる。A 図は「寛永十二年亥八月二日」という記載があることから、1635（寛永 12）年の景観を描いたとされる（図 4）。題名は「摂州尼ヶ崎城詳図」で、年代の隣に記載がある。戸田氏が 1635 年に大垣へ転封する直前の様子を描いている。この図は大垣で家臣の屋敷の配置を行う際に参考にしたという説がある [13]。大きさは縦 80 ㎝×横 152 ㎝であり、彩色は黄・青・茶・白・黒を主とする。藩施設名・家臣

名・寺社名があり、門・堀・橋を力強く描いている。現在、大垣市立図書館の所蔵である。戸田氏時代の城下町を描いた他の城下町絵図は、概略図とA図の写図のみであるため、詳細かつ確実に検討可能な城下町絵図はA図に限られる。

B図は（図5）、1664（寛文4）年に完成した築地町があることから、それ以降の作成であり、城下西端の竹谷御門（図2参照）の位置に加えて寺町の西側にも町の外に出る門と道筋があることから、1669（寛文 9）年に出屋敷が完成し街道筋が付け替えられる過渡期の様子を記録したものである[14]。景観年代は1667（寛文7）年頃であり、青山氏時代のうち、現存する最も古い景観を描いた図である。題名は「摂州尼ヶ崎城図」であり、城下町が描かれた面と反対の面に記載がある。藩施設名・家臣名・寺社名を記し、城郭の塀を強調して描いている。現在、個人の所蔵となっている。

C図は、図に記載がある家臣名と、桜井氏時代の文書である「御家中分限帳大概」に見える家臣名が多く合致することから、1716年～1736年（享保年間）の景観を描いている（図6）。桜井氏が尼崎に入封して5年後の、初期の家臣の屋敷の配置や、藩施設名・寺社名を把握するために描いたと考えられる。題名は書いていないため、所蔵先である尼崎市教育委員会が「尼崎城下武家屋敷一覧之図」と仮につけている。大きさは縦83㎝×横198㎝で、彩色は黄・水色・赤・黒を基調とする。町の形はA図とB図に比べて正確さが増している。凡例があり、その項目は道・塀・寺社・番所・水・櫓である。図は項目ごとに彩色している。築地町や出屋敷など町の端を省略して描いていることから、城下の中央に焦点を置いて描かれていると言える。

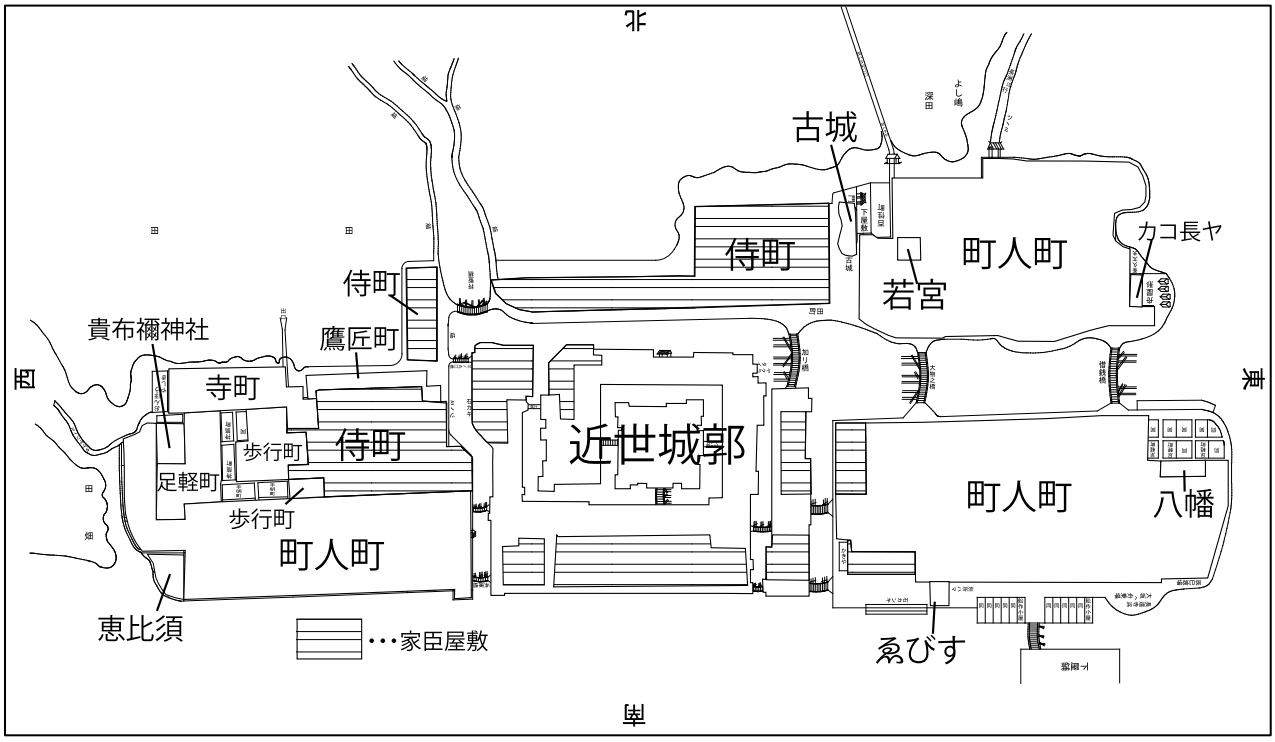

図 4　1635（寛永 12）年頃の景観（「摂州尼ヶ崎城詳図」：A図，大垣市立図書館蔵を基に作成）

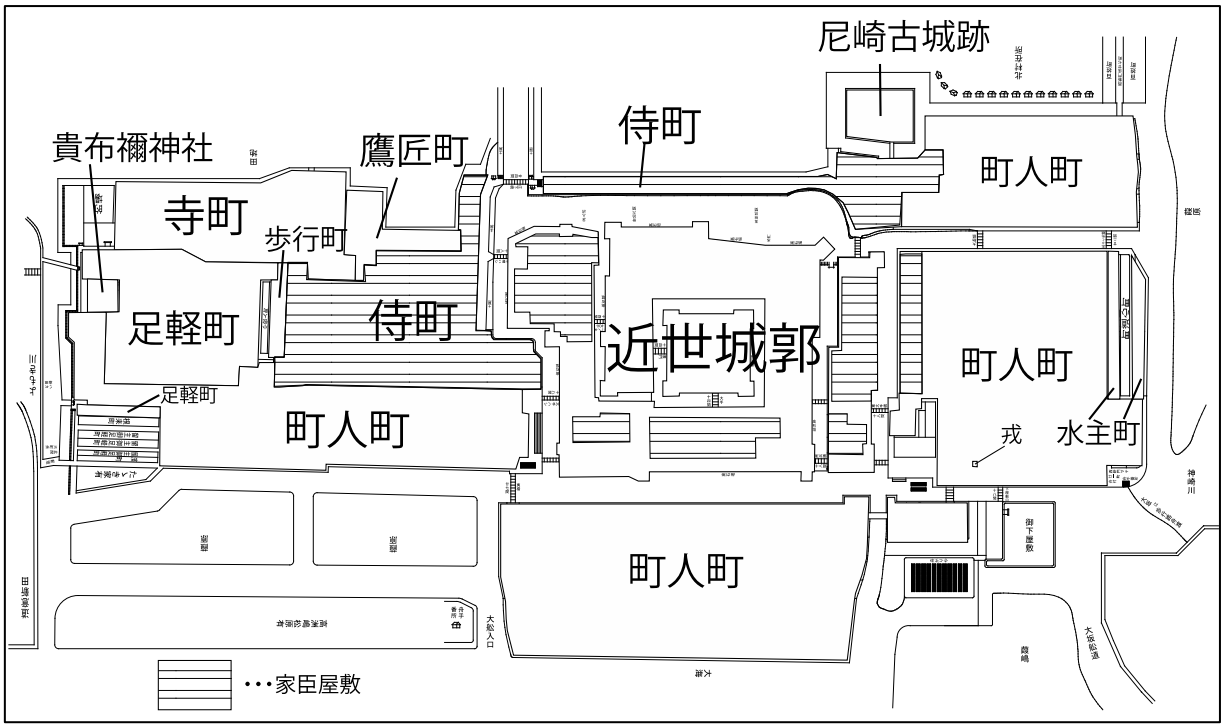

図 5　1667（寛文 7）年頃の景観（「摂州尼ヶ崎城図」：B 図，大阪市・個人蔵を基に作成）

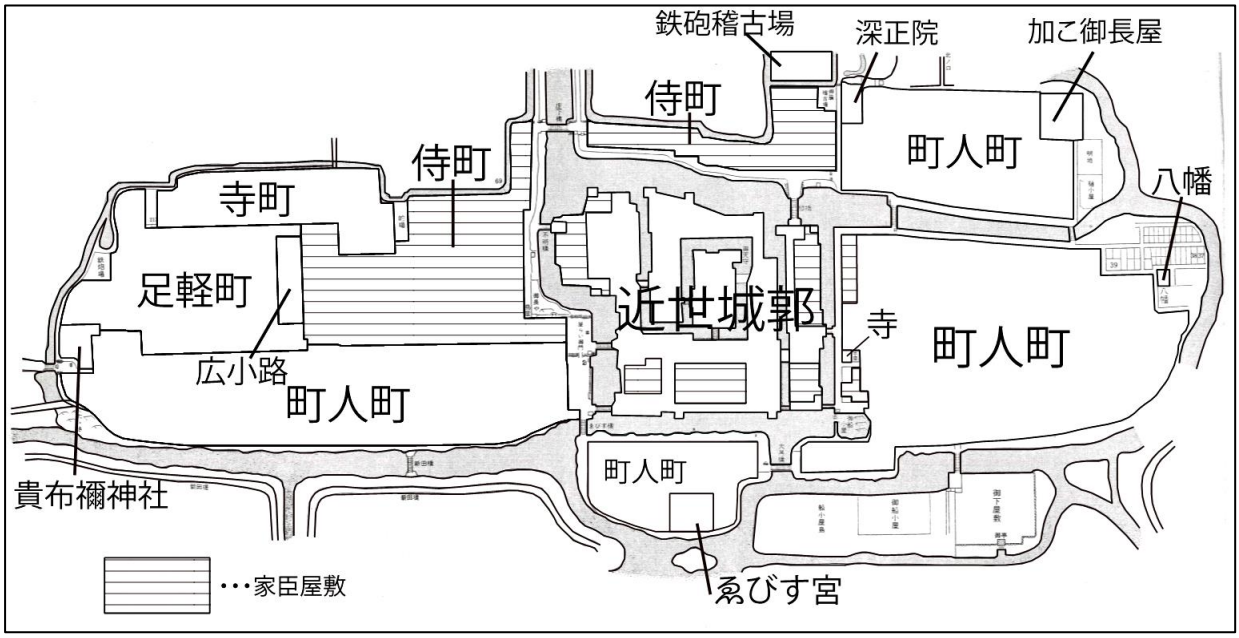

図 6　1716～1736 年（享保年間）頃の景観

（「尼崎城下武家屋敷一覧之図」：C 図，尼崎市教育委員会蔵を基に作成）

4. 尼崎城下町における空間構造の変遷

(1) 城郭の変遷

まず城郭の変遷について検討する。江戸時代初期には尼崎城下に2つの城郭が見られた。それは1526（大永 6）年に細川高国によって築造され1618年まで使われた城郭(以後、中世城郭と表記)と、1618 年に戸田氏鉄によって築造された城郭（以後、近世城郭と表記）である。まず中世城郭について検討する。中世城郭は、1531（享禄 4）年、細川両家の内部抗争の結果起きた大物崩れの場所である。この争いにより高国も自害に追い込まれた。また荒木村重が1578（天正6）年に織田信長を見限り挙兵した際、有岡城での籠城戦の後移った城郭でもある。A図の場合は「古城」という注記が見られる。また B 図では「尼崎古城跡」という注記がA図とほぼ同じ大物町内の北側に見られる。しかしC図では古城に関する注記が城下のどこにも見られず、A図、B図で中世城郭に関する注記がある場所は、「鉄砲稽古場」[15] となっている。よって戸田氏時代と青山氏時代には大物町に城郭跡があったが、桜井氏時代にはなくなり、新たに鉄砲稽古場となったのである。桜井氏時代には藩施設の一部に組み込まれ、鉄砲稽古場として新たな役割を果たしていた。小野寺（1982）は中世城郭について次のように述べている。「先下間後池田家系譜」には、慶長年間末の尼崎城について「天守無之櫓計、四方ノ堀有之五十間四方」と記されており、そのような状態は古城跡とほぼ一致する。おそらくここに、中世城郭があったと推定する、と述べる。

次に近世城郭について検討する。A図では図の中央に本丸、二ノ丸、松ノ丸、三ノ丸と記され、渦郭式[16]の縄張りが描かれている。また堀には橋が架けられ、橋を渡ると門と枡形が描かれている。本丸は正方形で描かており、北東の角には天守、それ以外の3つの角には櫓の注記も見られる。したがって、近世城郭が城下の中央にあったと言える。B図、C図ともA図と同じ所に近世城郭に関する注記や景観が描かれている。よって戸田氏時代から桜井氏時代を通して近世城郭は大名家の改易といった人為的要因、さらに風水害、落雷、地震といった自然的要因による大きな被害はなく存続したのである。

以上のことは次の2点にまとめられる。1つ目に、中世城郭は戸田氏時代と青山氏時代では古城としてあったが、桜井氏の時代に鉄砲稽古場に変わる。2 つ目に、近世城郭は各大名家の時代を通して、自然的にも人為的にも大きな変化はなく、存続したということである。

近世城郭は軍事機関から行政機関へ変わるものの、江戸時代を通して城下町の象徴であり続けた。また中世城郭は、江戸時代には本来の役割を終え、「跡」として歴史遺産と化していたのかもしれない。そのため江戸時代も約100年間過ぎた桜井氏時代には、鉄砲稽古場として、当時において必要な要素に変わったと考えられる。

(2) 家臣屋敷の変遷

まず侍町の変遷について検討する。家臣の屋敷は家臣ごとに区画が描かれ、そこに名が注記されている。城郭には南浜・東三ノ丸・西三ノ丸に、城郭より外側は田町・東屋敷・西屋敷に、各図とも家臣の屋敷は描かれている（図2・図3参照)。このうち、家臣屋敷が集中した地区は田町と東屋敷であることから、ここが侍町であり、西屋敷は足軽町や歩行町などである。戸田氏時代から桜井氏時代を通して侍町の位置に変化はなく存続した。

次に家臣の屋敷を禄高別で検討する。彦根城下町については、禄高別で屋敷地を分析した研究がある[17]。田中ほか（2016）は、水戸城下町における17世紀中頃と19世紀中頃の、家臣の屋敷を禄高別で表した。そこで本稿では、A 図、B 図、C 図から、1635（寛永12）年、1667（寛文7）年、1716（享保元）年と、各大名家時代の家臣の屋敷を禄高別で表し、彼らが配置される地区ごとに検討を行い、配置傾向を明らかにする。

まず禄高別に家臣数を表したものが表 1～3 である。これはA図、B図、C図に見られる各家臣名と、彼らの禄高を照合させたものである。その照合に用いた各文書は、戸田氏時代は「戸田左門

氏鉄公侍帳」、青山氏時代は「給帳集」、桜井氏時代は「御家中分限帳大概」である。

「戸田左門氏鉄公侍帳」(縦24.5㎝×横16.5㎝)は、題簽が剥落しているため、所蔵先の大垣市立図書館が仮につけたものである。1825（文政 8）年の写本を 1844（天保 15）年に写し直し、その際に加筆修正したものである[18]。1635(寛永 12)年から 1651（慶安 4）年までの家臣の姓名・禄高を記しており、各家臣に支給した禄高を把握するためのものと考えられる。ここではA図と最も年代が近い 1635(寛永 12)年の記述を参考にする。

「給帳集」（縦 30 ㎝×横 12 ㎝）は、1635（寛永 12）年から 1730（享保 15）年までの、青山氏時代の家臣の姓名・禄高を 13 ページに渡り記したものである。「戸田左門氏鉄公侍帳」と同様、各家臣の禄高を把握するためのものと考えられる。B図と最も年代が近い 1660（万治 3）年の内容を使用する。現在、尼崎市立地域研究史料館の所蔵である。

「御家中分限帳大概」は、1716（享保元）年から 1808（文化 5）年までの桜井氏時代における家臣の姓名・禄高・履歴を 130 ページに渡って記したものである。履歴の詳細さが目立つ。各家臣の個人情報を把握しておくためのものと考えられる。このうちC図と同時期の 1716 年～1736 年（享

表 1　戸田氏時代の禄高別家臣数
（「戸田左門氏鉄公侍帳」と「摂州尼ヶ崎城詳図」（A図）より作成）

禄高（石）	人数（人）	計（人）
1500	1	
1300	1	
1000	1	
700	2	8
550	1	
500	2	
350	1	
300	7	
250	5	30
200	17	
170	1	
150	34	
130	3	87
100	49	
50	10	10
計　24910	135	135

表 2　青山氏時代の禄高別家臣数
（「給帳集」と「摂州尼ヶ崎城図」（B図）より作成）

禄高（石）	人数（人）	計（人）
1000	3	
900	1	
850	1	6
520	1	
400	2	
300	9	
250	15	44
200	18	
150	19	
130	1	
120	3	32
100	9	
70	1	
60	1	6
50	4	
計　20690	88	88

表 3　桜井氏時代の禄高別家臣数
（「御家中分限帳大概」と「尼崎城下武家屋敷一覧之図」（C図）より作成）

禄高（石）	人数（人）	計（人）
700	1	
600	3	4
400	1	
300	2	
260	1	
250	1	
240	1	25
220	1	
210	3	
200	15	
190	1	
150	12	
140	1	
130	2	32
120	2	
110	2	
100	12	
90	6	
80	5	
70	8	21
60	2	
計　13770	82	82

保年間）の内容を使用する。現在、岡本元興氏が所蔵する。

なお、ここで用いた家臣については、各文書に石高を支給されたことが確認できる者に限る。

各時代の家臣を禄高別で表すと、次のような傾向が示される。表 1 の戸田氏時代は、家臣の禄高の範囲は 50 石～1500 石と、比較的幅広い。戸田氏時代における平均禄高から見た家臣の状況を検討してみると、まず平均禄高は 185 石である。平均に近い禄高 200 石の家臣が 17 名いるが、禄高 100 石の家臣が 49 名と、最も多くを占める。全体的に見ると禄高の低い家臣が多いと言える。

表 2 の青山氏時代は、家臣の禄高の範囲は 50 石～1000 石である。その中でも 150 石、200 石、250 石を支給されている家臣が多い。平均禄高は 235 石であり、平均的な禄高を与えられた家臣が多いことが判る。

表 3 の桜井氏時代は、家臣の禄高の範囲は 60 石～700 石と、戸田氏時代と青山氏時代に比べて幅狭く展開している。平均禄高は 168 石であり、平均に近い禄高 150 石の家臣が 12 名、190 石の家臣が 1 名、200 石の家臣が 15 名であり、合わせて 28 名に及ぶが、禄高 100 石未満の家臣が 21 名を占めている。

次に表 1～3 を 4 段階に区分し（表には破線により表現）、家臣の禄高別割合を棒グラフで示した（図 7）。4 段階の区分は、表 1～3 に共通して禄高 100 石未満、100 石以上～200 石未満、200 石以上～500 石未満、500 石以上とする[19]。

各大名家時代の家臣の禄高別割合は、次のようになる。戸田氏時代は禄高 100 石以上～200 石未満の家臣が全体の 42.4%以上と、この層に偏っており、禄高 100 石未満が全体の 2%とかなり少ない。青山氏時代は禄高 200 石以上～500 石未満の家臣が全体の 52.4%と過半数になり、500 石以上の家臣も全体の 25.5%となる。桜井氏時代は禄高 200 石以上～500 石未満の家臣が全体の 40.7%を占めており、禄高 100 石以上～200 石未満の家臣が全体の 29.4%を占める。戸田氏時代の家臣の禄高別割合を基準とすると、青山氏時代の家臣は禄高の比較的高い 200 石以上の家臣の割合が増す。また桜井氏時代の家臣は、禄高の比較的高い 200 石以上の家臣が若干増えるが、禄高が低い 100 石未満の家臣も増加する。

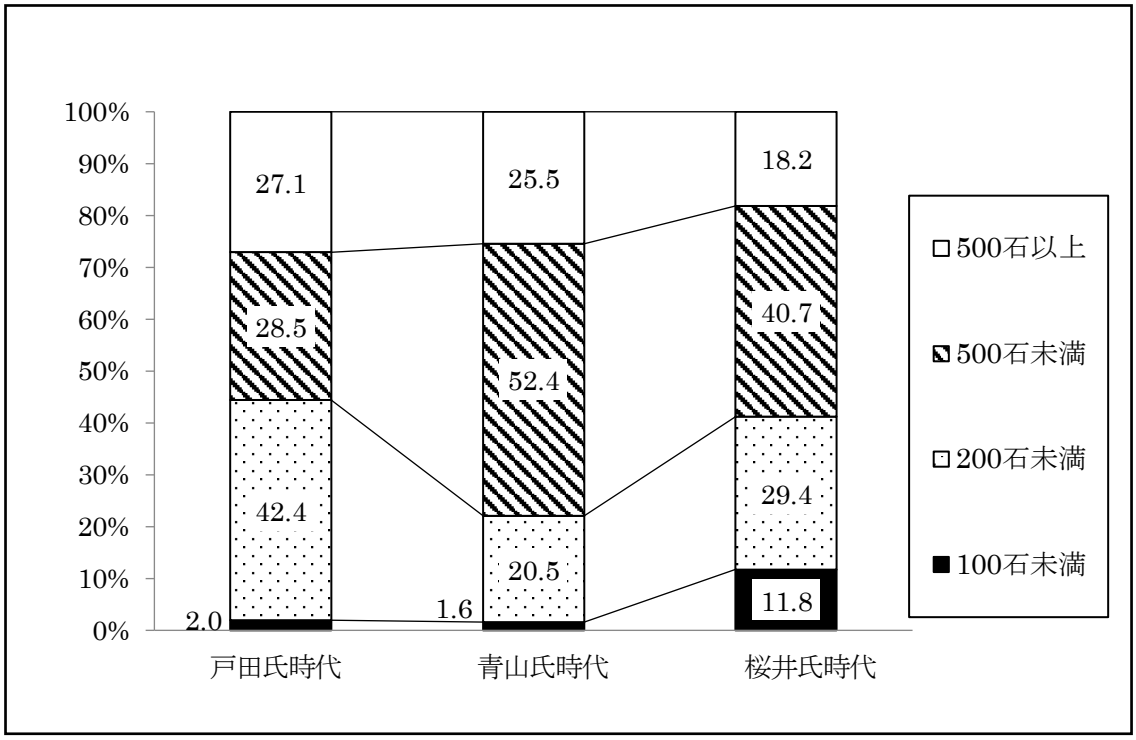

図 7　各大名家時代の家臣の禄高別割合（表 1～3 に基づいて作成）

次に、上記と同じ4段階の区分で、家臣の屋敷が見られる地区ごとに、配置傾向を検討する。平井（2009）は、GISを用いて洲本城下町絵図から読み取れる侍町や町人町といった城下を構成する要素ごとに区分し、景観復原図を作成した。そこで本稿においてもGISを使用し、尼崎城下における家臣の屋敷地を禄高別で表した。戸田氏時代が図8、青山氏時代が図9、桜井氏時代が図10である。凡例は図8～10に示した通りである。また凡例において「不明」としたものは、城下町絵図には家臣名の注記があるが、文書には家臣名が表記されておらず、禄高が不明の家臣の屋敷地を表している。

図8によると戸田氏時代は、南浜は禄高500石以上の家臣（以後、上層家臣と表記）の屋敷が多いが、一部に禄高100石未満の家臣（以後、下層家臣と表記）の屋敷も見られる。東三ノ丸・西三ノ丸は、禄高100石以上～200石未満と200石以上～500石未満の家臣（以後、中層家臣と表記）の屋敷が最も多いが、一部で上層家臣の屋敷がある。田町・東屋敷は中層家臣が多いが、下層家臣もまばらに見られる。

図9によると青山氏時代は、南浜は上層家臣が多く見られる。東三ノ丸・西三ノ丸は中層家臣が多いが、一部で上層家臣もある。現在、西三ノ丸には契沖生誕比定地の碑が建てられている。契沖は1640（寛永17）年に尼崎で生まれ、国学者として著名な人物である。西三ノ丸はこの時代、250石取りの家臣が最も多い地区である。契沖の父・下川元全は250石取りの家臣であったため、ここに生誕比定地の碑がある。田町・東屋敷は中層家臣が最も多いが、下層家臣も見られる。

図10によると桜井氏時代は、南浜は上層家臣が最も多い。東三ノ丸は全て中層家臣であり、西三ノ丸・田町・東屋敷は中層家臣が最も多いが、下層家臣も見られる。

以上のことから次の3点にまとめられる。1つ目に、南浜は各大名家を通して上層家臣の屋敷が最も多い。2つ目に、東三ノ丸・西三ノ丸は、各大名家を通して中層家臣の屋敷が多い。しかし桜井氏時代は下層家臣の屋敷が見られる。3つ目は、田町・東屋敷は、各大名家を通して中層家臣と下層家臣の屋敷が見られる。下層家臣の屋敷は、青山氏時代に最も少なく、桜井氏時代に最も多くなる。

つまり、侍町は、中国街道を監視するために城郭西側に置かれたと考えられる。そして、南浜に上層家臣の屋敷を配置することが多いのは、戸田氏時代は南浜の南に隣接して中国街道が通っていたため、有事の際に信頼を置ける家臣を置いておく必要があったからと考えられる。また中国街道の南は海であることから、海上からの守りを堅固にするため上層家臣の屋敷を置き、それが後の大名家にも引き継がれたと推測される。東三ノ丸・西三ノ丸は、桜井氏時代に下層家臣の屋敷が増えるが、それは、桜井氏が藩主となる頃には江戸幕府が約100年間続き、安定した時代であり、城郭を防備しておく必要性が薄れていたとも考えられる。田町・東屋敷は、下層家臣の屋敷が青山氏時代に最も少なく、桜井氏時代に最も多くなる。青山氏時代は各時代の中でも下層家臣の数が少ないため、城郭から最も離れた場所である東屋敷にも禄高の高い家臣を配置したからと考えられる。また桜井氏時代は下層家臣の数が多いため、城郭から最も離れた場所に置くと考えられる。青山氏の時代は、経済が豊かな時期であること、桜井氏時代は経済が徐々に停滞する時期であることが関係している可能性もあろう[20]。

(3) 下級武士などが居住する町の変遷

次に城下における下級武士などの居住する町の変遷を検討する。ここでいう下級武士とは、侍町や城郭付近に居住する家臣以外の武士らのことをいう。

まず足軽町を取り上げる。足軽町は、A図では、西屋敷の区画ごとに「足軽」の注記が連続して見られることから、足軽町と判る。B図においても同一の書き方がされている。しかしC図では足軽町に関しての注記は城下のどこにも見られない。A図、B図と同じ場所に細かい区画が連なってお

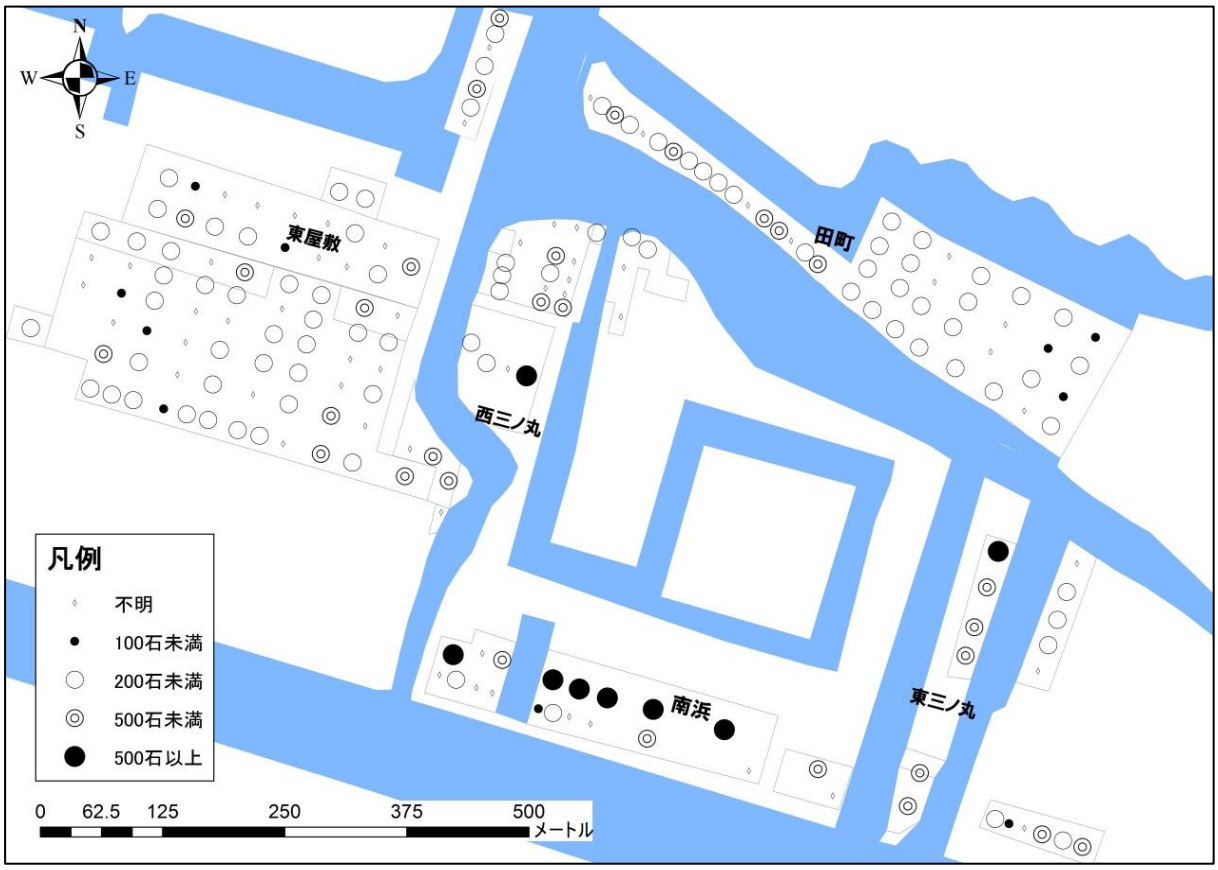

図８　戸田氏時代の家臣の禄高別屋敷地（表１と「摂州尼ヶ崎城詳図」（A 図）より作成）

図９　青山氏時代の家臣の禄高別屋敷地（表２と「摂州尼ヶ崎城図」（B 図）より作成）

図 10　桜井氏時代の家臣の禄高別屋敷地（表 3 と「尼崎城下武家屋敷一覧之図」（C 図）より作成）

り、区画ごとに所々ではあるが氏名が見られ、それは主に角にあたるところに注記されている。おそらく区画は屋敷を表しており、氏名は角にあたる所に住む者を表しているのであろう。それはそこに住む者を把握するために書かれたのではないか、と推測される。戸田氏時代と青山氏時代は「足軽」という注記が西屋敷一帯にあるため、ここが足軽町であったと判る。桜井氏時代には直接的な表現はされていないが、連続した細かい区画と氏名が見られることから、足軽町であったと推測される。すなわち各時代を通して西屋敷に足軽町があったと考えられる。

次に鷹匠町について取り上げる。鷹匠町とは、一般的には鷹の飼育、鷹狩りのための調練や鷹狩りのことといった鷹に関するいっさいのことを掌る鷹匠の住む屋敷町のことであり、尼崎に限らず、各地に見られる町名である。鷹匠は家臣の性格を持った職能集団である[21]。A 図では「鷹匠町」の注記が東屋敷北側に見られる。B 図も同一の書き方がされている。しかし C 図では城下のどこにも見られず、A 図、B 図で「鷹匠町」が見られた場所には、家臣名が見られる。このことから戸田氏時代と青山氏時代は鷹匠町が東屋敷北側にあったが、桜井氏時代はなくなり、家臣の屋敷へと変わる。

歩行町について取り上げる。歩行町は、徒士町とも記し、一般的に徒歩で行列に従い、あるいは先導した士の住む町を指す。A 図では「歩行町」の注記が西屋敷東側に見られる。B 図も同一の書き方がされている。C 図では城下のどこにも見られず、A 図、B 図で「歩行町」が見られた場所には、「広小路」の注記が見られる。戸田氏時代と青山氏時代は歩行町が西屋敷東側にあったが、桜井氏時代にはなくなり、新たに広小路となる。

尼崎城下は海に面した城下町であるため、水運に関する施設も数多くある。船乗りや船頭が住ん

だ屋敷や町に関して、A 図には「カコ長ヤ」の注記が大物町東端に見られる。また C 図にも同じ場所に「加こ御長屋」が見られる。しかし B 図には同じ場所には見られず、辰巳町東端に「水主町」の注記が見られる。戸田氏時代と桜井氏時代には大物町東端にあり、青山氏時代にだけ辰巳町東端に移転していたとは考えにくい。おそらく青山氏時代においても同様の大物町東端にある可能性は高い。青山氏時代に作成された他の城下町絵図を検討してみても、辰巳町東端に「水主町」の注記はなく、「水主町」と読み取られるような景観も見当たらない。青山氏時代に辰巳町東端に「水主町」の注記がある理由は、現地点では不明である。

足軽町、鷹匠町、歩行町、水主長屋を検討してきたが、各要素とも戸田氏時代からあったが、時代が進むと別の施設に変わる場合がある。足軽町と水主長屋については各大名家時代を通してあり、鷹匠町は家臣の屋敷に、歩行町は広小路に変わる。鷹匠町は桜井氏時代に一般的な家臣の居住区として表現が変わっただけとも考えられる。広小路は、防火帯として作られたのである。西屋敷の東端に位置することから、東屋敷に火が回らないようにするためと考えられる。

(4) 町人町と街道の変遷

各図には「町屋」、「町や」、「町屋敷」という注記が見られる。A 図には城郭東側一帯と城郭南西側一帯に、碁盤目状になった道の各区画に「町屋」の注記があり、「町屋」に隣接した場所に「同」の注記が見られる。このことから城郭東側一帯と城郭南西側一帯は、町屋の集合体である町人町であると判る。町名でいうと大物町、市庭町、別所町、風呂辻町、宮町、中在家町にあたる（図 2 参照）。

B 図は「町や」が、A 図と同じ場所に連続する。また C 図は「町屋敷」が、A 図と B 図の町人町と判断できる場所に間隔を置いて記されている。したがって、戸田氏時代に造営された町人町が青山氏時代、桜井氏時代も継続してあったと分かる。しかし城郭南側は戸田氏時代が描かれた A 図に町屋敷に関する注記が認められず、B 図と C 図には町屋敷の地区が見られる。それが築地町である。築地町は B 図において区画ごとに「町や」の注記が連続して見られることから、青山氏時代から存在する町人町と判る。小野寺（1982）は築地町に関して、戸田氏の次の大名青山氏が 1635（寛永 12）年に尼崎へ入部した直後に、戸田氏の立てていた計画に基づいて着工し、1665（寛文 5）年に一応完成し、実に 30 年の歳月を要したのである、と述べている。このことからも、築地町は青山氏の時代に城下町の一部として拡張されたと判断できる[22]。

B 図の 3 年後に作成された「寛文十年頃尼崎城下絵図」によると、築地町の他に、青山氏時代に建設された町人町がある。それが城下西端にあたる出屋敷という地区である。「寛文十年頃尼崎城下絵図」に出屋敷に関する説明文が見られる。「寛文九酉歳五月朔日地刻、同中旬ヨリ築之、同年月成就ス、印南惣兵衛・飯尾惣太夫奉行ス」とある。小野寺（1980）はこの説明文について、出屋敷の町づくりは 1669（寛文 9）年 5 月 1 日に線引きが行われ、同月中旬より施工して、その月中に出来上がったと述べている。また出屋敷に関して、「寛文十年頃尼崎城下絵図」を見てみると、「宮町」が薄青色で彩色されており、出屋敷についても同色で表されている。これは同色を使用して、同じ町を表現している。

築地町と出屋敷の拡張により、尼崎城下を通る街道のコースにも影響が見られる。尼崎城下には戸田氏の時代から大坂と西宮を結ぶ中国街道が通っている。戸田氏時代の中国街道のコースは「摂州尼ヶ崎城図」[23]（1624 年作成と推定）から確認することができる。しかし「摂州尼ヶ崎城図」は概略図であるため、正確なコースは判断が難しい。そのため先行研究[24]も考慮しながら確認する（図 2 参照）。まず 1 つ目の道は、城下北西にある寺町西端から南へ進んで土橋に着くと東へ折れ、宮町を抜けると西大手橋西詰に着く。西大手橋を渡って南浜を東へ向かい、別所町へ着くと北に進み、大物町に至るという。また 2 つ目の道は、西大手橋西詰を北へ進んで城郭北側の家臣屋敷沿い（田

町）を通り、大物町に至るコースである。このように戸田氏時代は2つのコースがあり、どちらのコースも城郭の周辺を通るようになっている。

青山氏時代の中国街道のコースを確認すると、まず出屋敷の中心を進んで土橋を渡り、宮町へと向かう道を通って西大手橋西詰に着く。そして西大手橋を南下し、戎橋を渡って築地町に入ると東へ進み大国橋を渡る。そして別所町に着くと北へ向かい、大物町へ至るコースとなる。出屋敷と築地町が完成したことにより、元来のコースとは違うコースを取るようになっている。また青山氏時代ではコースが1つになったことも、これらの町が築かれたことと関係があると考えられる。桜井氏時代においても、青山氏時代のコースが継続して使用されている。

以上、町人町の基盤は、戸田氏時代に完成し、青山氏時代、桜井氏時代へと継承された。さらに築地町と出屋敷は青山氏時代に拡張され、桜井氏時代も引き続いて城下町の一部であった。尼崎城下を通る中国街道のコースは、戸田氏時代と青山氏時代とで変更が見られる。

江戸時代において、青山氏時代は経済成長にともなって商業活動が盛んな時代であったため、町人町を拡大したと考えられる。尼崎城下では、干鰯屋・生魚問屋・荷問屋（酒屋荷物など）といった業種が活発で、過書船や渡海船の貿易も盛んであった[25]。

(5) 寺社の変遷

寺社の位置はA図、B図、C図とも寺社名の注記から判る。寺社名を読み取り、尼崎城下町の地区ごとに分類したものが表4である。ここから読み取れることとして、城下で最も寺社が多くある地区は寺町である。初代藩主、戸田氏鉄が城下町建設の際に新尼崎城の区画内となる地区にあった諸寺をはじめ、各町内にあったものを移し集めたものである[26]。寺町の位置は各図とも城郭から見て北西方向にあり、変化はない。しかし各図の寺院名を読み取ってみると、寺町にある寺院数はA図が20ヵ寺、B図が14ヵ寺、C図が16ヵ寺と変化がある。各図に共通した寺町内の寺院名は全昌寺、本興寺、廣徳寺（広徳寺、光徳寺）、専賢寺（聖賢寺、栖賢寺）、甘路寺（甘露寺）、法遠寺（法恩寺、法園寺）、大学寺（大覚寺）、常遠寺（長遠寺）、如来院（女来院）、専念寺、常楽寺（上楽寺）、善通寺（全通寺）であり、合計12ヵ寺である。各図で寺院の注記に若干の違いが見られるが、おそらく同じ寺院である。したがって、この12ヵ寺は戸田氏時代から桜井氏時代にかけて存続した。このように寺町内では各時代を通して存続した寺院がある。しかし、各時代で何らかの動きがあった寺院もある。A図において12ヵ寺以外で注記が見られる寺院に、戸田氏の菩提寺である円通寺があげられる。円通寺に関して『尼崎市史』第2巻には、戸田氏の美濃国大垣への移封時にともない円通寺も大垣へ移転という記載がある。なお、円通寺は現在も大垣に存続している。B図では12ヵ寺以外に、全通寺と実線で分けられた四条があげられる。全通寺の宗派は時宗四条派であり、四条の注記がある場所も含めて全通寺一帯であったのか、あるいは全通寺とは別の時宗四条派の寺院があったのではないかと考えられる。C図で12ヵ寺以外に、法光寺、せんぢゅ院があげられる。この2ヵ寺は、A図の寺町で注記がある三光寺、仙住寺と、音や漢字が似ていることから、おそらく同じ寺院である。また正福寺と海岸寺は、A図とC図のどちらの図にも見られる。したがって法光寺（三光寺）、せんぢゅ院（仙住寺）、正福寺、海岸寺はA図とC図で共通した4ヵ寺なのである。

B図は寺町における寺社名の注記が他の図に比べて少ないが、寺社がこの時代に限り、無くなったとは考えにくい。B図には記す必要がないからか、あるいは絵師が書き漏らしたかといった事情が推測できる。したがってA図とC図で共通した4ヵ寺と、A図、B図、C図で共通した12ヵ寺とを合わせた16ヵ寺は、戸田氏時代から桜井氏時代まで存続した寺院であると判る。

寺町以外にある寺社について検討する。A図、B図の西屋敷西端中央に見られる貴布禰神社は、C図では城下西端に見られる。ここから貴布禰神

表 4　尼崎城下の寺社

史料名	「摂州尼ヶ崎城詳図」	「摂州尼ヶ崎城図」	「尼崎城下武家屋敷一覧之図」
	（A図）	（B図）	（C図）
年代	1635年	1667年	1716年
寺町	円通寺	×	×
寺町	全昌寺	全昌寺	全昌寺
寺町	本興寺	本興寺	本興寺
寺町	廣徳寺	光徳寺	広徳寺
寺町	専賢寺	聖賢寺	栖賢寺
寺町	甘路寺	甘露寺	甘露寺
寺町	法遠寺	法恩寺	法園寺
寺町	大学寺	大学寺	大覚寺
寺町	常遠寺	長遠寺	長遠寺
寺町	如来院	女来院	如来院
寺町	専念寺	専念寺	専念寺
寺町	常楽寺	上楽寺	常楽寺
寺町	厳覚寺	×	×
寺町	三光寺	×	法光寺
寺町	×	四条	×
寺町	善通寺	全通寺	善通寺
寺町	正福寺	×	正福寺
寺町	仙住寺	×	せんぢゅ院
寺町	海岸寺	×	海岸寺
寺町	常善寺	×	×
寺町	比丘尼寺	×	×
寺町	×	玄好寺	×
西屋敷	貴布祢大明神	貴舩明神	貴布祢大明神
中在家町	恵比須	×	×
大物町	若宮	［若宮］	［若宮弁才天］
大物町	×	［常念寺］	×
大物町	×	×	深正院
辰巳町	八幡	［鳥居の表記あり］	八幡
別所町	ゑびす	戎	×
別所町	×	［常性寺］	「寺」と注記あり
別所町	×	［正恩寺］	×
築地町	×	［戎社］	ゑびす宮

（「摂州尼ヶ崎城詳図」（A 図）、「摂州尼ヶ崎城図」（B 図）、「尼崎城下武家屋敷一覧之図」（C 図）、「寛文十年頃尼崎城下絵図」、「松平氏時代尼崎城下絵図」より作成）

※［　］内は「寛文十年頃尼崎城下絵図」と「松平氏時代尼崎城下絵図」に記載のもの。

社は桜井氏時代に移転したことが確認できる[27]。次にA図では別所町に見られる「ゑびす」は、B図において「戎」とある。しかしB図から3年後の景観を描いた「寛文十年頃尼崎城下絵図」において、別所町ではなく築地町の南端に「戎社」の注記が見られる。そしてC図では「ゑびす宮」は「寛文十年頃尼崎城下絵図」と同じ築地町に見られる。A図、B図、「寛文十年頃尼崎城下絵図」、

C 図で記載方法に若干の違いが見られるが、同じ神社である。したがって「ゑびす」は戸田氏時代には別所町にあったが、青山氏時代に築地町へ移転し、桜井氏時代も継続して築地町にあったと判る。この「ゑびす」の移転は、築地町が完成したことに関係がある[28]。貴布禰神社と「ゑびす」は、戸田氏時代から桜井氏時代を通して城下に存続したが、何らかの事情により移転した神社である。

「若宮」はA図では大物町に見られるが、B図と C 図では城下のどこにも見られない。しかし「寛文十年頃尼崎城下絵図」に「若宮」とあり、「松平氏時代尼崎城下絵図」(1716 年作成と推定)に「若宮弁才天」という注記がA図と同じ場所にあることから、各時代を通して「若宮」があったと判る。次に「八幡」は、A図、C図では辰巳町に見られるが、B図では城下のどこにも見られない。しかし「寛文十年頃尼崎城下絵図」にはA図、C図と同じ場所に鳥居と本殿が描かれており、「八幡」である可能性は高い。次に常性寺は、A図と B 図では見られないが、「寛文十年頃尼崎城下絵図」では別所町に記されており、C図では「寛文十年頃尼崎城下絵図」と同じ場所に「寺」とあるため、これが常性寺にあたることが判る。「若宮」・「八幡」・「常性寺」の3ヵ寺は、戸田氏時代から桜井氏時代まで、表記の違いこそ見られるが、各大名家の時代を通して同じ場所にあった寺社である。

次に正恩寺は、3 枚の絵図には城下のどこにも見られないが、「寛文十年頃尼崎城下絵図」を見てみると別所町にある。また常念寺についても、「寛文十年頃尼崎城下絵図」にだけ大物町に見られる。この2ヵ寺がなぜ「寛文十年頃尼崎城下絵図」にだけ見られるのかは不明である[29]。なおこの2ヵ寺は現在もある。

「恵比須」は、A図で中在家町に見られるが、B図、C図では見られないことから、戸田氏時代にはあったが、その後廃絶された神社である[30]。

深正院は、A図、B図では城下のどこにも見られないが、C図では大物町に見られる。桜井氏時代になって建てられた寺院である[31]。

以上、河野（2015）の研究は、貴布禰神社の位置の変遷について 1716 年とそれ以前の年代の城下町絵図とで検討を行っていた。本稿では貴布禰神社の位置に限らず、A図、B図、C図で見られる全ての寺社の変遷を明らかにした。各時代で移転した寺社や、城下町絵図の表記方法にこそ相違はあるが、実際は各大名家の時代を通して存続した寺社も多い。

尼崎城下の寺院は、檀家制度により、戸田氏時代から変わらない。しかし大名家ゆかりの菩提寺は城下の外に置かれることもあった。神社は城下内で移転することもある。

5. おわりに

本稿で明らかになったことをまとめると、以下の5点になる。

① 城郭について、中世城郭は戸田氏時代と青山氏時代では古城としてあったが、桜井氏の時代に鉄砲稽古場に変わった。近世城郭は各大名家の時代を通して、自然的にも人為的にも大きな変化はなく存続した。

② 家臣屋敷について、田町と東屋敷は各大名家の時代を通して侍町であった。禄高別で家臣屋敷の配置を見ると、南浜は各大名家を通して上層家臣の屋敷が最も多かった。東三ノ丸・西三ノ丸は、各大名家を通して中層家臣の屋敷が多いが、桜井氏時代は下層家臣の屋敷が見られた。田町・東屋敷は、各大名家を通して中層家臣と下層家臣の屋敷が見られた。下層家臣の屋敷は、青山氏時代に最も少なく、桜井氏時代に最も多くなった。

③ 下級武士などの居住する町について、足軽町と水主長屋については各大名家時代を通して存在し、鷹匠町は家臣の屋敷に、歩行町は広小路に変わった。

④ 町人町の基盤は、戸田氏時代に完成し、青山氏時代、桜井氏時代へと継承された。さらに築地町と出屋敷は青山氏時代に拡張され、桜井氏時代も引き続いて城下町の一部であった。

尼崎城下を通る中国街道のコースは、戸田氏時代と青山氏時代とで変更が見られた。

⑤ 寺社について、各時代で移転した寺社や、城下町絵図の表記方法にこそ相違はあるが、実際は各大名家の時代を通して存続した寺社が多い。

上記の変化の背景としては、各大名家が時代に応じた城下の整備を行うため、家臣の配置計画を見直したことが推測される。鉄砲稽古場や広小路のように、城下町の機能変化も一部にうかがえる。寺院の位置は檀家制度や大名家の菩提寺も影響したと考えられよう。

本稿では、先行研究で明らかになっていた、戦国時代における尼崎城の位置（中世城郭）・中国街道のコース・寺町・築地町・城の櫓・貴布禰神社に加えて、近世城郭・侍町・足軽町・町人町（築地町以外）・鷹匠町・歩行町・水主長屋・寺社（寺町以外）の変遷を、年代を追って検討することができた。

また従来の研究では、江戸時代前半の変化が最も現れた点のみを検討しているが、本稿では1635年、1667年、1716年を対象年代とし、各大名家時代の景観に着目して、江戸時代を通じた変遷を空間的に復元した。但し各要素が変わった直接の事情など、不明な点もなお残る。

今後は、関連史資料にさらに注意しつつ、他の城下町との比較検討も進め、江戸時代における城下町の空間的復元や機能・役割の変化を探っていきたい。

注

1） 鳥羽正雄『近世城郭史の研究』（日本城郭協会、1962年）などがある。

2） 城下町プランとは、戦国期（A）型、総郭（B_1）、型、総郭（B_2）型、内町・外町（C）型、郭内専士（D）型、開放（E）型によって個々の城下町を分類したものである。年代が下るにつれ（A）型から（E）型へ向かう城下町が多い傾向にある。

3） 日本史分野からの研究には、小島通裕『城と城下』（新人物往来社、1997年）や、市村高男『戦国期東国の都市と権力』（思文閣出版、1994年）や、仁木宏『空間・公・共同体　中世都市から近世都市へ』（青木書店、1997年）などがある。

4） なお前川（1991）は、大手前女子学園有岡城跡調査委員会が行なった宮ノ前地区の発掘調査結果をもとに、屋敷割りなどを検討し、伊丹郷町全体について推測している。ほかに歴史考古学では、例えば『季刊考古学』53号・103号・120号（雄山閣、1995年・2008年・2012年）において、織豊系の城郭や城下町を構成する各要素の発掘成果が示されている。また大阪歴史博物館編『天下の城下町大坂と江戸』（大阪歴史博物館、2013年）などもあるが、これらの研究はあくまで出土した遺構・遺物に基づいている。城下町絵図は出土位置や、町全体を把握する際に用いられ、使われ方が限られる。

5） 城下町絵図とは、城下町の構造を描いた近世絵図をいう。城下町絵図は城下絵図とも称される。 城下町絵図は武士名や屋敷割が描かれたものが最も多く現存しており、主に武士の屋敷地を把握するために作成されたようである。それ以外には、城下町建設や築城の際の計画図、戦時における作戦用図、都市改造を行うための計画用図、町人町を把握するための図などがある。

6） 日本城郭協会（1963）『日本の名城と城址』、pp.212-213による。

7） 尼崎市立地域研究史料館編（2007）『図説尼崎の歴史』、pp.13-14を参考にした。

8） 尼崎市立地域研究史料館編（1996）『尼崎地域史事典』、pp.21-23と33pによる。

9） 岡本静心編（1968）『尼崎市史』第2巻、pp.90-91を参考にした。

10） 各大名家の説明には『新井白石全集　藩翰譜』・『新井白石全集　続藩翰譜』・『江戸時代全大名家事典』・『新訂寛政重修諸家譜』・『西

宮市史』・『日本史総覧Ⅳ　近世一』を参考にした。

11）尼崎市立地域研究史料館が網羅的に把握しており、作成年代や所蔵先など尼崎市立地域研究史料館の研究によるところが大きい。

12）矢守（1973）は、城下町絵図に記載された文字を「注記」と表現している。本稿もこれに従う。

13）大垣市立図書館の見解である。

14）『たどる調べる尼崎の歴史』下巻、pp.115-121 の内容を参考にした。

15）鉄炮稽古場とは、砲術の演習場のことである。

16）渦郭式とは、本丸を中心として二ノ丸・三ノ丸を渦巻状に配置した縄張りの形式の一つである。

17）禄高別で彦根城下町にある屋敷地を復原したものがある。城下町がいつの頃のものかは不明である。
近年では『2016 年度人文地理学会大会要旨集』において、小野寺・永井などによる「幕末期の水戸城下における藩士の屋敷と禄高の関係」という同様の研究も見られる。

18）尼崎市立地域研究史料館（1984）の「戸田氏鉄侍帳」によるところである。

19）例えば、戸田氏時代における 2.0%というのは、総禄高数に占める 100 石未満の家臣の禄高を示している。50（石）×10（人）÷総禄高（石）×100 で出している。以下、同じ。

20）江戸時代における日本全体の経済状況は、17 世紀半ばは新田開発によって米の生産量が増えたことや、桑や麻などを商品作物として生産したことなどにより、江戸時代の中でも比較的豊かであった。享保年間の頃は米の供給過多から年貢米の換金相場が低下したことなどにより、徐々に停滞した。このような状況が尼崎城下にも反映したと考えられる。

21）日本歴史大辞典編集委員会編（1985）『普及新版日本歴史大辞典』第 6 巻、pp.406-407 を参考にした。

22）『尼崎市史』第 2 巻には、「築地町の町割は、6 尺 5 寸（1.97 メートル）棹でなされている。青山氏が入部してから全領の農村に行った検地が、全て 6 尺 3 寸棹になっていることから、おそらく町割に関しては、戸田氏時代にすでに終わっていたのである。したがって、築地町の建設は青山氏時代から開始されたのではなく、戸田氏時代から既に始まっており、青山氏時代に完成したのである。」と述べている。

23）B 図と同じ題名であるが、異なる絵図である。

24）小野寺（1980）は、「尼崎城下における中国街道のコース変遷に関して、築地町が造成される以前は西から来た道は、西大手橋の西詰で南下し、兵庫橋を渡り、城郭の南端の武家屋敷の前を海沿いに東進するコースと、西大手橋から北上して、庄下橋を東へ渡ると「是ヨリ東西道筋」と書かれ、北側の外堀沿いに大物町に至るコースがあり、城郭の南北を通る 2 筋に分かれていたのではないか。」と述べている。

『尼崎地域史事典』には、「1618 年（元和 4 年）に開始された近世尼崎城の築城によって、旧来の中国街道の道路が分断されたため、当初は別所町から城郭の南端を抜けて中在家町へと通過していたが、戸田氏に代わって入封した青山氏が 1652 年（承応元年）に街道を城郭の南側の小島と葭島に付け替える工事を計画し、別所町の岸田屋孫左衛門・嶋屋吉兵衛の両名に街道筋の町場建設を命じた。2 つの島が大黒橋で結ばれ、整然とした碁盤型街路の町がこの両島のうえに完成したのは、1664 年（寛文 4 年）のことである」、「戸田氏時代の 1635 年（寛永 12 年）の段階では、西屋敷の北西部から外へとつながっていたが、青山氏時代には竹谷御門を出て堀を渡ったところで北へ鍵の手に曲がるよう道筋が付け替えられ、この北上する街道沿いに出屋敷が建設された」とある。

木村（1983）は「築地町が出来てからの中

国街道は、築地町に迂回するコースとなっている」と述べている。

25) 尼崎市立地域研究史料館編（1996）『尼崎地域史事典』、pp.32-33 による。

26) 尼崎市立地域研究史料館編（1996）『尼崎地域史事典』、pp.285 による。

27) 貴布禰神社について『尼崎市地域史事典』には、西屋敷役人町（現：西桜木町）にあったものが、1715 年（正徳 5 年）に宮町（現：西本町 6 丁目）に移転したと述べている。

28) 「ゑびす」について『尼崎市地域史事典』には、「「ゑびす」は戎神社のことで、1312 年～1317 年（正和年間）に近江坂本の日吉神社に属する一社が尼崎に祭られ、のち別所町と別所村（現：西本町 5 丁目）に分社し、また、別所町の分社である初島恵比須がその後、築地町に移り、現在の初嶋大神宮となった。」と述べている。

29) 「常念寺」について『尼崎市地域史事典』には、1652 年～1655 年（承応年間）に焼失したとあるが、「寛文十年頃尼崎城下絵図」に常念寺が描かれていることから、「寛文十年頃尼崎城下絵図」の景観年である 1670 年には何らかの形で建立していたのではないかと考えられる。その後 1720 年（享保 5 年）に本堂が現在地に再建したと『尼崎市地域史事典』にはあるが、C 図の景観年、すなわち 1716 年は、再建途中であったため描かれなかったか、あるいは絵師の書洩らしなどによるものかと考えられる。

30) 『尼崎市地域史事典』は、「「恵比須」は浜戎と言われ、中在家町の氏神であった。現在当地は祠を残すのみとなっている。祠となった時期については不明である」と述べている。絵図を見る限り B 図の頃、すなわち、青山氏時代には祠になったのではないだろうか。

31) 深正院について『尼崎地域史事典』には、桜井氏の菩提寺であるとの記載があるため、C 図に限り注記が見られるのである。

参考文献

阿刀田令造（1936）:「仙台城下絵図の研究」，斎藤報恩会博物館図書部研究報告第 4.

尼崎市立地域研究史料館（1984）:「戸田氏鉄侍帳」地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―14-1・2，pp.105-119.

尼崎市立地域研究史料館編（1996）:『尼崎地域史事典』，尼崎市.

尼崎市立地域研究史料館編（2007）:『図説尼崎の歴史』上巻，尼崎市.

尼崎市立地域研究史料館編（2016）:『たどる調べる尼崎の歴史』下巻，尼崎市，pp.115-121.

伊藤毅（2010）:「1　移行期の都市イデア」（吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市 1　イデア』，東京大学出版会）pp.3-38.

今井　尭ほか編（1984）:『日本史総覧Ⅳ　近世一』，新人物往来社，380 p.

今泉定介編（1905）:『新井白石全集　藩翰譜』，吉川半七.

今泉定介編（1905）:『新井白石全集　続藩翰譜』，吉川半七.

岩田浩太郎（1992）:「都市経済の転換」（吉田伸之編『日本の近世　第 9 巻　都市の時代』，中央公論社）pp.263-302.

大阪歴史博物館編（2013）:『特別展　天下の城下町　大坂と江戸』，大阪歴史博物館.

岡本静心編（1968）:『尼崎市史』第 2 巻，尼崎市役所.

岡本静心編（1968）:『尼崎市史』第 5 巻，尼崎市役所，pp.164-167.

小野寺淳ほか（2016）:「幕末期の水戸城下における藩士の屋敷と禄高の関係」（『人文地理学会大会　研究発表要旨』，人文地理学会）pp.132-133.

小野寺逸也（1980）:「江戸時代前期の尼崎城下絵図について（一）」，地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―9-3，pp.27-30.

小野寺逸也（1982）:「江戸時代前期の尼崎城下絵図について（二）」，地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―11-3，pp.22-31.

小野　均（1928）:『近世城下町の研究』，至文堂.
小和田哲男（1979）:『城と城下町』, 教育社, pp165-168.
木村万亀子（1983）:「中国街道の踏査」，地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―12-2, pp.23-54.
工藤寛正編（2008）:『江戸時代　全大名家事典』, 東京堂出版，pp.9-11.
桑門智亜紀編（2012）:『季刊考古学』120 号　特集織豊系城郭の成立と展開，雄山閣.
河野未央（2015）:「尼崎藩城下町絵図の翻刻作業」, 地域史研究―尼崎市立地域研史料館紀要―115，pp.69-72.
後藤雄二（1997）:「城下町仙台の拡大に伴う侍町の変化」，東北地理 29-3，pp.146-153.
滋賀県立安土城考古博物館・(財)滋賀県文化財保護協会編（2007）:『城と城下町-彦根藩と膳所藩を中心に-』，滋賀県立安土城考古博物館, 31p.
関戸明子・木部一幸（1998）:「館林城下町の歴史的変遷と地域構成」, 歴史地理学 40-4, pp.19-37.
高柳光寿ほか編（1980）:『新訂寛政重修諸家譜』, 続群書類従完成会.
田中耕市ほか（2016）:「水戸城下における 17 世紀中頃と 19 世紀中頃における禄高別は拝領屋敷地の分布」（『第 22 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集』，第 22 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」実行委員会）pp.51-60.
鳥羽正雄（1962）:『近世城郭史の研究』，日本城郭協会.
西宮市（1960）:『西宮市史』第 2 巻, 西宮市役所, pp.39-43.
日本城郭協会（1963）:『日本の名城と城址』，社会思想社，pp.212-213.
日本歴史大辞典編集員会編（1985）:『普及新版日本歴史大辞典』第 6 巻, 河出書房新社, pp.406-407.
芳賀章内編（1995）:『季刊考古学』53 号　特集江戸時代の発掘と文化，雄山閣.
原田伴彦・芳賀登編（1991）:『図録・都市生活史事典』，柏書房，26p.
平井松午（2009）:「洲本城下絵図の GIS 分析」, 情報処理学会研究報告，pp.1-8.
松岡利郎（2002）:「尼崎城の五軒屋敷」, 地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―31-3, pp.2-32.
宮島了誠編（2008）:『季刊考古学』103 号　特集近世城郭と城下町，雄山閣.
矢守一彦（1970）:『都市プランの研究』，大明堂, pp.247-285.
矢守一彦（1973）:「米沢城下絵図について―地図史的考察の試み―」，史林 56-2，pp.145-163.
矢守一彦（1975）:『都市図の歴史−日本編』，講談社.
吉田伸之（2012）:『伝統都市・江戸』，東京大学出版会.
渡辺理絵（2000）:「米沢城下町における拝領屋敷地の移動―承応・元禄・享保の城下絵図の分析を通して―」，歴史地理学 42-4，pp.23-42.

付記

本稿は 2016 年 1 月に大阪教育大学大学院教育学研究科に提出した修士論文に修正を加えたものであり、その一部は 2016 年 8 月に行われた兵庫地理学協会 2016 年度夏季研究大会（於：兵庫県立加古川東高等学校）においてポスター発表し、貴重なご助言をいただきました。記して御礼申し上げます。

（かわさき　ありさ　神戸大学大学院
人文学研究科博士課程後期課程）